

遠州丸に乗船し、苦難のソ連を後にした。

十月二十二日、懐かしの祖国舞鶴港の旧日本海兵団の跡地で大勢の出迎えの方々に迎えられた。これでやっと日本に着いたと思うと急に体の力が抜けてしまった。思えば長い長い苦難の道であった。

図らずもこの手記を書いている日は、今を去る五十三年前の終戦の日と同じ八月十五日である。今日も朝から太陽が照りつけ暑い暑い一日になりそうだ。妻が私のそばで夏の甲子園の高校野球を見ている。

平成十年八月十五日、平和な日本である。今はシベリアの大地に眠る幾多同胞の心安らかにあれと祈る。

平成十年八月十五日

タイシエツト抑留の記

静岡県 小山 昕 爾

昭和二十年七月七日、齊々哈爾の砲兵隊に現役入隊しました。義勇軍の当時の頃よりたびたび所外訓練で

軍隊に勤勞奉仕し内務班の生活をしたことのある私は、さして緊張もせず、一カ月の初年兵生活を過ごしました。ちょうどその日、私は不寝番の三番立に立つことになりました。八月八日早朝、週番士官の「非常呼集、不寝番はおらんか」の大声に私はびっくり仰天して眠りから覚めました。二番立の戦友が私を起こした記憶が頭をかすめたからです。義勇軍の当時は不寝番の際、時々あったことで、その癖が残っていて眠ってしまい、不寝番不在で非常呼集のラッパを聞き逃したと責任を直感しました。この非常呼集、ソ連軍が満州に侵入した戦争を知らせる緊急なもので、ほかの班の者は完全軍装でハイラル方面へ行動を起こしたと週番士官の小山田少尉が班長に話したのを聞きました。本来なら重営倉に入れられるべきところ、運が良いと言えるのか、なぜか班長は私をあまり怒らず、「お前のお蔭で残留の部隊と行動を共にすることとなった」と言い、班長は私に懲罰として軽機の弾薬六百発の運搬役を命じました。直ちに駅に行き、無蓋車に乗せられました。

発車すると同時に大雨に見舞われましたが、列車は前線とは反対の哈爾濱に向かっていて、安堵の心もあり、涼しく雨を受け止めました。案の定、列車は哈爾濱駅に着き、馬溝口の富士見女学校に駐留することとなりました。

私には駅から五キロメートルの行軍が大変な苦勞でした。カッパを掛けていましたが、大雨のため荷物は濡れて重く、その上弾薬の重みが肩にくい込んで、歩くことが困難な状態でしたが、不寝番で皆に迷惑をかけた懲罰と心に決めて歩き続けました。この時、幾重にも肩より垂れ下った弾薬を後より持ち上げて歩いてくれた山下の行為はありがたいものですが、彼は「小山のお蔭で最前線に行くことなく哈爾濱に後退できた、ありがとう」と小さな声で私に言いました。

富士見女学校にたどり着き駐留することになり、市街地であることでソ連軍とは一度も交戦せずに一週間が経過して、天皇の終戦を知らせる玉音放送を校内のラジオより直接聞きました。軍隊生活四十日足らずの私には、正直言って、これで重い弾薬を運ぶことなく

命も捨てずに済んだと心の中で喜びました。

ソ連軍の指示で哈爾濱競馬場で武装解除となり、自動小銃を腰に構えたソ連兵をこの時はじめて見ました。軍隊に入っても実弾を撃つこともない私、こんな奴等と戦わなくて良かったのです。武装解除して、数日間富士見女学校に滞在しました。この時、隊長が「部隊は解散したので現地召集の者で家族の心配な者は家族のもとに帰って良い」と言われ、四人ほど軍服のまま重い荷物を持って急ぎ校外へ出ていきましたが、後日聞いた話によると、このような施設から出て来る日本兵を網を張って待っていて、ことごとく殺すことを楽しみにした中国人の集団がいたと聞きました。

こんなことがあってソ連兵の監視も厳しくなりました。「日本兵は皆ソ連軍の責任で牡丹江に集結して、人員が集まり次第ソ連の港より日本に帰す」と通訳が隊長に話し、隊長から「俺が責任をもって日本に全員帰すようにするから単独行動をしないよう」言い渡され、哈爾濱駅より貨車に乗せられ牡丹江に向かいます。

たが、途中一面坡の駅で下車させられ、「ここからは牡丹江まで歩け」とのこと、少数のソ連兵に守られ、日本に帰れる希望もあるので、ひたすら歩き続けました。

途中で激戦地と思われる丘にさしかかりました。まさに「十里風なまぐさし新戦場」でした。日本兵の多くの死体が散乱しており、すべての死体が、靴等目ぼしい物は奪いとられ、腐乱しべちゃんこの骨だけが軍服を着ている状態でした。せめて軍隊手帳でも親もとに届けてやろうと手分けして集めていると、突然杉本が、「この死体は満鉄と一緒に働いた者だ」と、難しい漢字の名前を読んで、「これは俺が責任もって親に届ける」と班長に渡さず自分で所持しました。

ようやく牡丹江の近くに来て野天の糧秣廠のところまで来ました。食料も少なく、何か食べるものを探すことにしました。まず目につくのが焼却されたおびただしい缶詰の山で、幾つもの山が連なっています。満足なものはないかと一心に探しましたが、皆バンクして一つも見付かりませんでした。防火用水の池の

底に一斗缶に入った水飴を軍隊手帳を親に届けると所持した杉本が発見しました。「これは亡霊がお前に授けたものだから、班長に渡すな」と諭し、初年兵五人で隠し持つて心ゆくまで水飴をなめました。とてもおいしく、食べあきた頃に班長が発見され、渡しました。

牡丹江近くで四隅に望楼のある柵の中に收容されました。望楼の上で重機関銃で空の電線を切って喜んでいるソ連兵がおり、威嚇をかねて遊んでいるのだと思えました。四、五日過ぎた日に、いよいよ日本に帰ると掖河の駅で上下二段に仕切られた貨物列車に夕方近くになって乗せられました。この時、貨車の二段の構造は人間が寝ていける、長距離を運ぶためではないかと、悪い予感がしました。暗闇を待つて列車は東に向かつて動き出し、私も深い眠りに入りました。

翌日の午後、大きな駅で、前後反対に、来た方向に進行し始めました。この時貨車の扉に外から錠がかかけられ、これで完全に日本に帰る希望がなくなりまして。停車駅で小便をするのに困るからと扉を開けてお

くようにしましたが、我々初年兵は扉のすぐ近くに陣取ったので、腰を充分に外に出して小便しても風の強い時は小便のしぶきがかかり、悩まされました。

貨車が一週間も走ったでしょうか、列車が止まり扉が全開され、「あっ！ 海だ」と叫ぶ声がありました。

これはバイカル湖で、水面に近づいてなめてみました。これは塩分はない、きれいな水でした。小便のしぶきがついている顔を洗いました。気持ち良かった。本当に広く、遙か対岸の山々がかすんで見え、方向を変えて見れば水平線も見えました。

イルクーツクを過ぎ、ジマ、チェレンホーボとまた一週間以上が過ぎ、タイシエットに着き、引込線の貨車に乗り換えて森林地帯に入り、ネーベルスカヤで下車しました。線路がないため、何キロメートルか歩いて、夕方、古い木造の建物が連なっている場所に着きました。一番手前の建物でシベリア生活の第一夜。とうとうこんなところで連れてこられてしまったのです。一生こんなところで暮らすのかと思案を巡らし眠りの床に就きました。

ここで思案をさせないほどのびっくり仰天する歓迎を受けました。眠りにつくと何やらゴソゴソと身体に近づいて血を吸われるのです。それも待ってましたと言わんばかりの歓迎で、あちらこちらで皆もやられている様子でした。暗闇で正体がかめませんが、風の何倍もの吸引力で、身の毛もよだつ思いでした。私はそっと手を差し伸ばして捕獲に成功、たしかな手ごたえで、思い切り指先に力を入れてつぶしてみました。鼻に指を近づけると、ひどく嗅いにおいがしました。朝まで眠れませんでした。

朝になってこれが有名な南京虫であると班長が教えてくれ、朝から退治にかかりました。寝台の木の割れ目、柱の割れ目に一列縦隊に赤い身体を隠しているのが退治するには好都合で、細い木を割れ目に差し入れて上下に動かすことで簡単に退治できました。昨夜の仇と徹底的に殺したので、どうやら次の日はよく眠ることができました。

所内には建物が六棟あって二千人収容できました。ここで小隊五十人、三個小隊をもって中隊とし、三個

中隊で大隊を編制して作業隊としました。この作業隊をタイシエット、ネーベルスカヤまである鉄道をブランクまで建設予定の測量線上の三百キロメートル間に配置したことから、百七キロ地点の大隊は百六十三キロ地点に配置した大隊まで五十六キロメートルが「ノルマ」と決めていた様子でした。

私の大隊は百七キロ地点に配置され、五十人入る幕舎が仮幕舎で、シベリアの冬は寒いと幕舎の周囲を土塀で囲みました。しかし、屋根には何も乗せず、内部は両側に中段を設け、上下が寝台で、中央に鉄板のストープを一個設けて住居を完成しました。森林伐採、道路の建設に従事し、大工の心得のある者三人が木造建築の住居造りに専念しましたが、ノルマ達成のため木造住宅が遅れ、幕舎生活で零下五十度の冬を過ごすことになりました。

毎日が「ノルマ、ノルマ」で作業は厳しく、その上食物は高粱か粟のおかゆに近いのが飯盒に八分目ほどが二人分で、二人で分け、黒パン三百グラムが一日分で三食に分け、栄養価は少なく、これらを全部合わせ

て強く握ってしまえば片手の中に入れてしまいうほどの量でした。健康な人が空腹のため飢えて栄養失調になっていくのは非常につらく、病気になるっていくより苦しいものだと感じました。

昭和二十一年一月は寒さが厳しく、幕舎生活では夜が非常に寒く、自分の持ち物を全部着用しても寒くて眠れぬ夜が続き、労働に疲れた体も休まらず日々を衰えを感じ、私も栄養失調で鳥目になりました。

タイシエットに抑留された者は、こんなところにつれて来られ日本に帰れず、苦勞をしてこの地で一生を終るよりはとの絶望感で自殺者もあり、ほかの収容所では三人が収容所を脱走し、一週間後に発見され三人とも射殺された事件があり、ソ連の監督官が通訳を通じて大隊長に話し、大隊長からもこのシベリアで脱走しても無駄であるとの沙汰がありました。

以下の事件はソ連人を大きく震撼させた事件であったようですが、戦後五十年を経た今日、タイシエットのソ連の司令部に勤務していた津田氏の話によると、満州で飢えをしのぐため人の肉を食べたことのある二

人組がタイシエツトに最後の頃抑留され、こんなところにはいたらいずれは殺されると観念して、おいしそうな若い一人をそそのかして三人で脱走し、二人組は共謀して若い一人を殺し焼肉にして食べていたといえます。この光景を、追手となった収容所の監視兵が目撃してびっくり仰天して怖くなり、監視兵の二人は同時に銃の引き金を引き殺してしまつたそうです。この話を聞き、私は当時を振り返って想像したことは、あの時期、人の肉も平気で食べる日本人ならこんな物も食べるだろうと、牛、豚等の臓物で捨て場に困るものや何やら得体の知れない動物の内臓を冷凍して小さく圧縮した物が食料としてきたのではないかということでした。これをゆでて塩を少し入れて煮ると大きく膨張して、これが刻まれて副食になつて配られました。飯盒の蓋に山盛りあり、咬むと少し硬いものもありましたが、だんだん味が出てきました。俺のはあそこの肉だと誰かが言いましたが、皆うれしそうに食べていました。私も涙が出るほどうれしく思いました。このため、二十一年の冬を越す頃には、枕木を一本敷くのに

日本人の捕虜一人を殺すのかとささやき悪評した言葉も言われなくなりました。その後ソ連側も、抑留者に希望をもたせてノルマ達成に心掛けた様子でした。

昭和二十二年十一月頃、一枚の日本製の葉書が配られ日本へ便りを出すよう言われました。借りた鉛筆で父あてにシベリアで生きていると書きました。細かい字でいろいろ書きたかったのですが、大切な借りた鉛筆なので、後の者が書くのと言われ、無事に帰ると大きく書きました。この頃より痔の悪かった私は用便の時出血するようになり、作業に出て雪原で用を足した時など赤い血で真っ白い雪を染めたことで恐怖し、「大便だけはできるだけ回数減らすこと」を心掛けました。結果は便秘となり長時間お尻を寒さにさらすこととなり、脱肛の痔が親指の先ぐらいになり、肛門の中に収めるのに苦労するようになりました。

昭和二十三年三月十一日、不思議な夢を見ました。兄貴か肉親か先祖の誰かわかりませんが、全身血だらけの男が私に会いに来て、「こんなに悪い体、軍医に診てもらえ」と言われたような気がしますし、自分が

勝手に判断したようにも思いますが、とにかく軍医に診てもらおうことにし、便所にいって脱肛の出たままで診療所に行きました。軍医に見せたら、ちょうどこの折ソ連の女医がいて、「おお、ゲモロイ」と言って早くしまえと手まねで指図され、名前を聞かれてロシア語で書いた紙を渡され、三月十二日の横に私の名前を記入したので、日は良くおぼえています。病院に着くと、瘦せて仕事ができない今にも死にそうな者が多数いて、初老の男に「よかつたな、東京ダモイだ」と聞かされた時は、天にも昇るほどうれしかったものです。

話によると、タイシエツト地区はあと一年抑留生活が残っているが、あと一年の重労働に耐えられない者、使いものにならない者をソ連の女医が診察して死なないうちに日本に帰すのだということで、ソ連の女医は二百六十キロメートルの収容所まで使いものにならない者たちを集めに行ったので、あと二十日ほどかかるだろうということでした。さすれば俺は何と運が良い男よと自認しました。またしても、終戦の日の事

件と同じく、今度は先祖の血だらけの亡霊に助けられたこととなり、あの時変な夢を見ることもなくそのまま過ごしていたら、あと一年の労働に耐えられたかは自信がありません。おそらく大切な血をシベリアの大地に流し続けた後、自身もシベリアの土となったと思えます。「ダモイ」は五月一日の「メーデー」の祭典に参加させられた後でしたので、五月二日に「東京ダモイ」の列車に乗り、死のタイシエツトを後にし、心うきうき一路帰国となりました。

シベリア抑留記

滋賀県 松岡 藤太郎

入 隊

昭和十六年二月二十三日、現役兵として寧安陸軍病院衛生要員として歩兵第三五連隊に入営。同二月二十四日、大阪港出発。同三月四日、牡丹江省寧安県樺林着、第九中隊に編入され軍人としての基礎教育を終